

第10回 東京芸術文化評議会 議事要旨

- 1 日 時 平成23年1月26日（水曜日）午後4時から午後5時半まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 石原都知事
鳥海評議員、野村評議員、福原評議員、三宅評議員、宮田評議員、
森評議員、山本評議員
逢坂専門委員、片山専門委員、菅野専門委員、草加専門委員、熊倉専門委員、
後藤専門委員、長田専門委員、中村専門委員、古井戸専門委員、
大和専門委員
- 4 議 事
 - (1) 伝統芸能検討部会について
 - (2) 東京都の文化政策の成果と今後の方向性について
 - (3) 芸術文化支援の新たな推進体制について

5 発言要旨

○福原会長 それでは、ただいまから第10回東京芸術文化評議会を開催いたします。

今日は、皆さんにお忙しい中をご出席いただきまして、ありがとうございます。

今日ご出席の方々は揃いましたので、始めさせていただきます。知事は10分ほど遅れられるそうです。

その前に、この評議会の評議員の中から安藤評議員、蜷川評議員、そして今日いらしています三宅評議員の3名の方々は、先日、文化勲章を受賞されました。おめでとうございます。それから、杉本評議員は紫綬褒章を受賞されました。大変おめでたいことで、お祝いを申し上げるとともに、この評議会においても引き続きいろいろご意見をいただけますようお願いしたいと思っております。

それでは、早速ですが、まず事務局から本日の資料の確認をお願いいたします。

○桃原文化振興部長

(資料確認)

○福原会長　それでは、次第に沿って会議を進めさせていただきます。

まず、伝統芸能検討部会でございますが、前回——前回ばかりではありませんが、前回の評議会で野村評議員から、伝統芸能の質を高めつつ、後継者育成と発表の場が必要であるというご意見をいただいております。伝統芸能についてはいろいろな面がございますので、専門部会の形で別にご検討いただくことになりました。そこで、事務局から皆様から部会の設置についてご賛同が得られたという報告を受けましたので、伝統芸能検討部会を設置したわけでございます。そこで、委員のご紹介と部会の概要説明を事務局からいたします。よろしく申し上げます。

○桃原文化振興部長　それでは、伝統芸能検討部会の委員の皆様方を紹介させていただきます。お手元の資料1をご覧くださいながら進めさせていただきます。

まず、部会長の草加委員でございます。

○草加専門委員　草加でございます。よろしくお願いたします。

○桃原文化振興部長　草加委員につきましては、既に文化都市政策検討部会の委員でもいらっしゃるかもしれませんが、新たに今伝統芸能検討部会の部会長もお引き受けいただいております。

中村委員でございます。

○中村専門委員　中村でございます。よろしくお願いたします。

○桃原文化振興部長　古井戸委員でございます。

○古井戸専門委員　どうぞよろしくお願いたします。

○桃原文化振興部長　大和委員でございます。

○大和専門委員　大和です。よろしくお願いたします。

○桃原文化振興部長　なお、第1回の伝統芸能検討部会は1月19日に開催されております。伝統芸能に係る発表の場や稽古場、また子供たちが伝統芸能に触れる機会の確保のほか、今後の伝統芸能の発信のあり方など、伝統芸能の継承と創造発信のあり方につきまして、専門的見地からご議論をいただいているところでございます。今後、月1回程度の開催を予定しております。

○福原会長 事務局から説明がございましたが、ご意見はおありでしょうか。野村先生、いかがですか。

○野村評議員 この評議会の第1回の中からご提案を申し上げておまして、今回、検討部会を立ち上げていただいたことを誠にありがたく存じております。ほかの評議員の先生方にも大所高所からぜひご意見を賜りたいと存じます。よろしく願いをいたします。

○福原会長 何かおありでしょうか。

それでは、これから月1回ということで伝統芸能検討部会を進めさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

伝統芸能検討部会においては、より専門的な見地から広く調査をしたり、検討したり、対応策を練っていくということで報告を受けているわけでございます。

次に、文化都市政策検討部会から、東京都の文化政策のこれまでの成果と今後の方向性について報告がございまして。

東京芸術文化評議会は、東京の文化芸術の創造発信のために必要な文化政策についてさまざまな提言を行ってきたわけですが、この評議会はこの3月で第2期としての区切りを迎えるわけでありまして。その区切りを迎えるに当たって、現在までの東京都の文化政策の成果はどうだったのかということと、今後の方向性について皆様のご意見をいただきたいわけでございます。これからご報告をした上で第2期評議会のまとめとしたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

評議会の提言に基づく都の文化政策の進展については、事務局から説明をいたしますので、よろしく願います。

○桃原文化振興部長 それでは、スクリーンをご覧くださいながらお聞きいただきたいと存じます。

お手元に配付している資料2でございますけれども、評議会の第1回目が開催されて以降さまざまなご提言をいただきましたが、この右側の列の「都の取組」のところにありますように、文化発信プロジェクト、東京都美術館の施設大規模改修などの取組を進めてまいりました。

続きまして、お手元にお配りしている資料3にございます「東京都の文化政策の成果と今後の方向性」について、文化都市政策検討部会のほうで論点をまとめていただいております。

中央の列、「達成した成果」の緑色に塗っております事業は、評議会発足以前から実施していた事業、オレンジ色の事業は、評議会の提言により実現した事業となっております。

部会のまとめにおきましては、都の文化政策の主要戦略を「文化の創造力強化」「世界への文化発信の強化」「文化振興基盤の整備」に区分してございます。

まず、主要戦略Ⅰでございますが、新進若手アーティストの支援として、東京ワンダーウォールなどの事業を実施しております。東京ワンダーウォールは、毎年1,000点の応募から選ばれた作品を都庁舎内に展示するとともに、トーキョーワンダーサイトと連携し、アーティストにステップアップの機会を提供してまいりました。

トーキョーワンダーサイトは、新進若手アーティストの発掘・育成・発信まで一貫した支援を行ってまいりました。また、東京発の本格的なレジデンス施設を開設し、世界の主要都市との間で幅広いネットワークの構築を進めております。

ヘブンアーティストは、東京を拠点に活動する大道芸人に駅や公園などの公共空間を活動場所として開放しているものでございまして、現在、都内約50か所で約300組のアーティストが活動を行い、まちの中に定着しております。

ストリートペインティングは、公園などの公共空間を開放いたしまして、若手アーティストに発表の機会を提供しているものでございます。

これら新進若手アーティストの支援に関する今後の方向性といたしまして、まず創造発信交流拠点の形成として、現代美術館との連携によるトーキョーワンダーサイトの充実強化、また芸術系の大学との連携によるアーティストのサポート強化が挙げられております。また、文化産業が注目されている中で、クリエイターなどを含めた幅広い人材の育成支援についても掲げられております。

子供の創造力の育成といたしましては、体験型文化事業に取り組んでまいりました。実演家が直接子供に指導を行うキッズ伝統芸能体験、アーティストを文化施設や学校へ派遣するパフォーマンスキッズ・トーキョー、子供たちがつくった竹の楽器を活用したミュージック&リズムスTOKYO KIDSなどを実施いたしました。これらの今後の方向性といたしまして、実績をさらに強化していくため、学校現場での実施など、教育政策との連携を掲げております。

次に、地域の文化創造力の強化といたしましては、東京アートポイント計画を展開して

おり、NPOやアーティストと連携したさまざまな先端的取組を展開しております。これらの今後の方向性といたしまして、市民・企業・行政の協働によるさらなる展開が掲げられております。

次に、主要戦略Ⅱであります。文化発信プロジェクトを展開しております。

六本木アートナイトでは、昨年70万人を超える参加者を集めまして、東京の新たな魅力の発信の場所となっております。

恵比寿映像祭は、実験的でメッセージ性の高いプログラムを揃えて展開しております。

フェスティバル/トーキョーは、独創性の高い作品の上映を通じて、国際的なプラットフォームを形成しつつございます。

東京発・伝統WA感動は、伝統芸能の資源が集中している東京ならではの質の高いプログラムを揃えております。

これらの今後の方向性といたしまして、国際フェスティバルへの進化など、文化発信プロジェクトの発信力強化、伝統文化の継承と世界への発信、また観光政策との連携が挙げられております。

さらに、プロジェクトの発信力を高めるために、総合プロデューサーの導入が必要であるということが指摘されております。

続いて、主要戦略Ⅲでございます。

芸術文化評議会の設置以降の提言に基づく数多くの施策が具体化されております。

芸術文化発信事業助成につきましては、海外公演、国際共同制作、伝統芸能分野の拡充が実現しております。

これらの今後の方向性として、東京型アーツカウンシルの整備、文化創造の推進力となる人材の育成支援が挙げられております。

なお、アーツカウンシルにつきましては、この後、片山専門委員からご報告がございます。

都立文化施設の機能強化でございますが、平成12年から民間企業出身の方に館長をお引き受けいただき、民間経営の視点からのさまざまな経営改革が実現されております。

また、東京都美術館、芸術劇場、庭園美術館の改修、そしてその創造発信機能の強化に取り組んでございます。

また、都内の演劇の稽古場不足に対応するため、東京舞台芸術活動支援センターを設置

し、現在80%以上の稼働率で利用されてございます。

これらの今後の方向性といたしまして、創造発信拠点、また人材育成拠点としての都立文化施設の機能強化が掲げられてございます。

次に、来年度の東京都の文化振興の予算案につきまして、資料4のほうでご説明申し上げます。

文化施設の大規模改修が本格化することなどにより、平成22年度の約138億円から215億円と約76億円、55%の増となっております。厳しい都財政の状況を踏まえまして事業の精査を行い、新たな展開に向けた予算を確保したところでございます。

説明は以上でございます。

○福原会長 それでは、引き続いて今村参与から説明をお願いします。

○今村参与 3点ほど補足の説明をさせていただきます。

最初に、平成12年、この東京構想2000に基づいて作成された「当面の東京都の文化政策手法の転換と取組」というのがございました。それに引き続き、平成14年には、文化の一元化として、教育庁と生活文化局の2局で別々に運営されていた文化政策や文化施設を一元化してから、東京都の文化政策は大きな政策転換を行ってきました。その成果は、今ご説明をいただいたとおりであります。そして、平成18年度、この東京芸術文化評議会が発足してから既に4年がたちます。この4年間でいただいた提言をもとに迅速にさまざまな施策を展開し、現時点まで計画、実行、評価、改善のPDCAサイクルのPDCまでが回ったというふうに認識をしております。今回、この第10回の評議会は、このサイクルのA（改善）、あるいはもう一度施策を見直し、手をつけられていない分野や選択と集中を行う機会に至ったと理解しております。その見直しをするに当たって、私のほうから3点について補足説明をさせていただきます。

まず第1点目、文化政策としての人材育成についてです。

トーキョーワンダーサイトでは、若手アーティストやクリエイターの育成を行ってまいりましたが、そのプログラムが成果を上げてきている中、次の課題として、プロデューサーのようなプログラムやイベントをつくれる人を育てていくことが大きな課題となってきています。その役割は、専門家としての力量とともに、文化による地域づくりや文化のインフラづくりなど、現代社会に求められている文化の役割を認識した広い視野を持つ人材づくりが求められております。また同時に、現代芸術のみならず、デザインや映画などク

リエイティブな分野までをきちんと政策でカバーしていくことが重要なことだと思います。今後はぜひ産業労働局のデザイン振興策などと連携をして、この評議会で議論していただければと思っております。

また、この人材育成事業は、発信力にもなり得ると思っております。現在、トーキョーワンダーサイトで実施しているアーティスト・イン・レジデンスは、既に滞在をしたアーティストや文化関係者が延べ400名を超えております。東京が世界のアート活動のステップアップのサポートを行っているということが東京の一つの発信力と認識されてきています。若手クリエイターの支援は、功成名を遂げてからの支援とは異なり、小規模な、あるいは少額な支援でもその後の活動にとって大きな支援となる可能性がありますので、大きな発信力としての効果を生むものと思っております。また同時に、この閉塞感のある現在においてこそ、人間の根幹である創造力を発揮するための支援は次世代への大きなエールとなり、社会に新たな活力を還元してくれるものだと信じております。

2番目に、発信力のあるイベントへの集約化です。

オリンピック招致における文化プログラムでも検証されたように、東京は世界に類を見ない文化施設の集積地であります。ここ東京をより魅力ある発信拠点とするには、それを連携してどのような発信力のあるイベントをつくれるかが鍵ではないでしょうか。東京マラソンが並立するマラソンイベントを統合して一つの国際的な発信力のある事業となったように、文化においてもそのような発信力あるイベントをつくっていくことが大切だと思われれます。

六本木アートナイトは、民間と国の文化機関、そして都と地域が連携して点が面になる事業です。この成果を生かして、有楽町・丸の内・銀座地域、あるいは青山・原宿・渋谷・恵比寿地域など、個性ある地域固有の面的な展開が重要になってくると思われれます。また、六本木アートナイトを皮切りに、ちょうど桜のシーズンの東京の3月を「東京アートウィーク」として、東京の美術施設がその時期に発信力のある展覧会を開催し、連携して文化観光にもなるようなイベントを開催していこうという動きもあります。ぜひこのような発信力のある事業の具体的な検討ができればと思います。

また同時に、フェスティバルについては、単なる打ち上げ花火のフェスティバルを超えて、人材育成や地域づくりを同時に抱え込み、人をどんどん巻き込んでいくダイナミズムを持つフェスティバルが今望まれているのではないかと思います。

最後に、3番目になりますが、東京都独自の政策と国の連携についてであります。

東京都の文化政策は、一地域としての文化政策のみならず、首都の文化政策でもあります。東京の発信力は国の発信力の大きな柱です。これまで日本の文化行政は、国と地方自治体が連携して施策を展開するものではなく、別々に文化施策を展開してきました。東京都はこれまで独自の先見的な施策を展開してきましたが、これからはそれと同時に国と連携したパートナーシップによる施策の展開も重要だと思われます。

例えば23年度の文化庁予算では、国際的な文化イベントの実施、新進芸術家の支援、アーティスト・イン・レジデンスの支援など、東京都がこれまで展開してきた文化事業と共通する施策が計画をされております。同時に、宮田評議員が文化庁の文化政策部会の部会長を務められているなど、何名もの評議員、専門委員の方が東京都の政策と同時に国の文化政策づくりに関わっていらっしゃいますので、ぜひ今後はより一層国の文化政策と連携して首都東京の文化政策を推進していただきたいと思います。特に前回の平田評議員からのご発言にあったように、文化観光の分野は特に緊密に連絡をとる必要もあるかと思ひます。

以上、3点について補足説明をさせていただきました。議論の参考にしていただければと思ひます。ありがとうございました。

○福原会長 ありがとうございました。これが4年間の成果のまとめのようなものでございます。

そして、今日ご欠席の評議員の方々からも書面等で意見をいただいておりますので、事務局からご説明いたします。

○桃原文化振興部長 お手元の資料5に3名の評議員の先生方からご意見をいただいております。

まず、杉本博司評議員です。

「東京都の近年の文化政策はそれなりの成果を上げてきたと思ひますが、特に例を挙げれば、トーキョーワンダーサイト事業と六本木アートナイトが挙げられると思ひます。

トーキョーワンダーサイト事業を事業モデルとして、都の所有する老朽化資産で活用されていないものは多々あると思ひますが、これらの場を現代のあらゆるジャンルのアートの為の場として活用することは、負の遺産を有効に活用できる有意義な方法であると思ひます。

六本木アートナイトも投資額に対する集客力には目を見張るものがあり、年々活性化する方向が見えます。地域の他美術館との連携をより強め、プログラムの充実をより図れば、国際的なイベントとして定着することは、必定であると思います。

最後に、都の運営する多くの美術館は改修時期を迎えています。開館時設計の不備、予想集客数の想定読みちがい（写真美術館）等により、現状に即した改修が必要とされます。今回庭園美術館の改修、増築に深くかかわりその感を強くしました。思い切った改修は、問題のある施設を再検討し、各美術館施設を世界レベルのスタンダードへと高めることのできる絶好の機会であると考えます。他にも多々ある中から、以上2点につき、申し上げました。」

続きまして、平田オリザ評議員です。

「本来、『東京芸術文化評議会』は、アーツカウンシルを目指して組織されたものであり、この評議会の下に、アーツカウンシルの実質を担う調査研究機関を置くべきではないか？

アーツカウンシルの設立にあたっては、国の動向を意識しつつ、重複を避け、一方で東京都のアーツカウンシルが、国のアーツカウンシルを引っ張るようなものを目指していただきたい。

都立の劇団、バレエ団の結成、芸術劇場付属の演劇学校の設立など、さらに大きな夢のある目標を立てるべきではないか。」

続きまして、宮本文昭評議員です。

「私の経験から申し上げますと、アーティストを育成することは大切だが、支援してもらって当たり前というような環境をあたえすぎてはいけない。恵まれた環境の人に成功例が少ないのは、揃いすぎているその環境のせいではないか。アーティストは、自分を世界に認めさせていかなければならない。そのためには、『根性』『気概』『生命力』を培う環境が必要だ。

従って、支援されることが「当たり前」になっている若手には、支援をしないことのほうがむしろよい。さじ加減が大切で、支援する対象を見極めることも重要だ。際立つ才能が1つあればよい（それを伸ばせばよい）。ずいぶん以前に、国の留学制度の要件に「大卒以上」というのがあったが、論外である。是非、支援する対象をしっかりと見極め、予算を上手に使ってもらいたい。」

以上でございます。

○福原会長 というわけで、それぞれ大変意義のあるご提言をいただきました。

それで、これまで矢継ぎ早に報告をいたしました、これからは皆様のご意見をいただきたいと存じますので、どうぞよろしく願いいたします。

知事は5時ごろ退室と伺っていますので、早目に皆さんにご発言をいただければありがたいと思っております。いかがでしょうか。どうぞ。

○石原知事 何かまちで面白いことを考えてください。以前、有楽町か丸の内界隈でいくつかの 패턴の牛を置いて、それにコンテンポラリーアーティストが彩色して、それぞれの企業が買ってどこかへ納めたと聞くのですが、あのようなことで何か面白いことはないですか。

宮田先生、学校へ行っているようなまだ若い大学生でも何か人前で面白いことができるようなもので。私がシカゴに行った時にどこかのまちで、人形がありまして、それはとてもよくできた人形で、タッソーのろう人形によく似ていまして、誰かが傘を差してタクシーを止めているようなものです。それほどアートフルではないのですが面白いなと思ったのです。

これに付随して1つ問題なのは、日本にこのような芸術的なイベントのできるよいプロデューサーがあまりいないのです。これはやはり皆さんで考えて、そのような人を育てていただきたいと思うのです。

○宮田評議員 実は明日から私どもの大学の卒業制作展で、今日は陳列をしていますが、今、知事がおっしゃったように、よい作品はごろごろとあるわけです。ただ、知事が最後におっしゃったように、それをどう伝えていくかという部分が、今の若者には不足しているのです。アーツカウンシルそのものもそうですし、あとマネジメントもそうです。若者を育てることではなくて、その伝える部分での人材育成はもっと取り組まないといけないし、それによってアートはこんなに楽しいのだということを感じてくれる一般の人たちの味方をつくるのが大事なのではないかと思えます。

○福原会長 ここまで来てわかりましたことは、今、宮田評議員の意見がございましたように、アーティストを助成するのではなくて、プロデューサーなり、プログラマーなり、あるいはアートマネジメントができる人をまず育てないといけないということです。回り道のようにあっても、そうしないと効果が上がってこないだろうということが強く認識さ

れるようになったわけです。今、知事や宮田評議員のおっしゃったこともそういうことだと思っておりますので、次期にその辺のことはよく考えていく必要があると思います。

いかがでしょうか。皆さん、4年やってこられて多分決して満足はしていないと思いますので、どうぞ遠慮なくおっしゃってください。

○宮田評議員 今、東京都美術館が改修中なものですから、発表の場が大学の中だけになりました。先ほど、何でも与え過ぎてはよくないというお話がありましたが、大学の狭い中でやることによって新たな発見ができるのです。その後、ここへ参りました時に、「ああ、この都庁を全部美術館にしたらどんなに面白いだろうか」という感じがしました。しかし、この会議については、どう考えてもあそこの小さなビジュアルでは、プレゼンテーションは見えないでしょう。失礼しました。

○福原会長 ありがとうございます。どうぞ。

○森評議員 前にも少し申し上げたことがあるのですが、青山、六本木の新美術館の前にトンネルがありまして、そこにアーティストが壁に絵を描いているのです。それがもう何年もずっとそのままになっていまして、もう少しきちんとマネジメントしないといけないと思っているのです。牛がいろいろなところに置いてあったプロジェクトと同じように、いろいろなスペースがあると思いますので、都庁の中で今ワンダーウォールをやっているんですけども、より多くの人が行き交うところ、表で触れるところに絵を描いたり、彫刻を置いたりできるようになればよいと思います。それで、一回やればそれでよいということではなく、キュレーションを続ける、マネジメントを続ける必要があるのだろうと思います。やるほうも楽しい、見るほうも楽しいという機会をつくりたいものです。

○石原知事 今の壁画ですが、かなり売れてきている作家たちに描かせているので、やはり一回描かせたものをつぶすのはもったいないと思います。

それともう1つ、仙寿院というお寺がありますが、その墓地の下にトンネルをつくったので、そこへお寺が絵を描かせたのです。よいことだと思ったら、スプレーで落書きをされた。

それで、結局全部白くつぶし直したのです。だから、森さんがおっしゃった絵がそうなら大変だと思っているのですが、あれは上にコーティングがされているのだろうか。

○今村参与 一応コーティングはしてあります。

○森評議員 あれを描いたのは大分前ですから、その時より随分アーティストたちが育っ

て有名になってきています。

○石原知事 でも、あれは大き過ぎて取りかえるわけにいかないでしょう。

○今村参与 できないことはないですが、さすがに何人かは中堅になっている作家なので、一部はちゃんと残しておきたいとも思っています。

○森評議員 そうですね。あるいは場所を増やすことも考えられます。

○今村参与 そうですね。

○石原知事 なるほどね。

○今村参与 よい場所に描くという方法もあると思うのですが、実はあれを描いた時はまだ六本木トンネルが開通していなくて暗くて怖いところだったのです。そこに絵を描いたら雰囲気はよくなった。都市のある意味で見捨てられた場所が、アーティストやアートが入ることによってぱっと光が当たるような、そのようなことをあの時考えていました。そんな場所をまた見つけられたら、と思っています。

○福原会長 三宅先生、いかがですか。

○三宅評議員 日本でもいろいろ面白いことは起きていますが、日本ではなかなか民間に伝わっていかないのです。文化とか、そういったものがあまり語られないという感じがします。経済優先になり過ぎていて、例えば技術など、いろいろなものをもう一遍考えることもせず、売れたものをそのまま外国に持っていったり、壊してしまったりという日本の現状があるので、これはやはり何とかしないといけないだろうと思います。日本人は、科学技術も、それから美的な要素も非常に高いもの、独特のものを持っていると思います。そういうものを何とか日本でもう一遍評価しなおす必要がありますし、なおかつ今大切なのは、先ほどからもありましたけれども、やはりマネジメントというか、それを支援する人たちを増やしていくことでしょう。

我々は最初の頃は本当に草がぼうぼうのところに道を見つけながら行ったわけですが、今はインターネットなどの簡単な方法があります。それも含めて、海外、国内の区別なく伝えていくための努力といいますか、そういう仕組をまず東京都で立ち上げていただけたら、それをみんな利用すると思うのです。金銭の問題になると評価の問題などが難しくなってくるのではないかなと思いますので、そういう形での支援ならよいと思うのです。今、日本はぎりぎり、特に地方なんかへ行くとそう感じます。東京都もそうだと思いますが、東京都は実績を上げてこられたからよかったと思う部分がたくさんあります。何か東京か

ら世界に発信できるといいますか、そういうシステムができないものだろうかとも思っています。

○福原会長 そうですね。これだけいろいろなことをやってきていますが、それが一般には見えないかもしれないですね。それをどうしたらよいかという次なる問題が当然出てくると思います。

鳥海さん、いかがですか。

○鳥海評議員 これまでの経験からいきますと、結局、東京というのは非常に大きな都市ですから、各地域を活性化していかななくてはいけないのです。ですから、六本木は、森さんのやってらっしゃる六本木アートナイトでよみがえりましたね。今、我々がやっている大手町から丸の内も大分変わってきたと思います。人の流れが変わってくるのです。人の流れを変えていくには、私もこの数年間やってみましたが、やはり誰がリスクをとるかははっきりさせてやらないとだめなのです。だから、いろいろなイベントを行うにしても、誰がリスクをとってまちのイベントを実施するのかということだと思えます。そういう意味では、やはりそのまちで中核の企業と手をつないでやらないといけない。そういう意味では、丸の内あたりは三菱さんを中心としていく。あるいはJRさんもあります。そのようなところを我々の中に入れていくことは非常に重要です。

それに関連していえば、今一番大切なのは、現在フォーラムがある銀座寄りの土地に、計画的に文化都市をつくっていくというような発想をすることです。

ですから、まさに先ほど三宅さんも言われましたが、マネジメントをどうやってうまくやっていくかということがこれから大きな問題になってくるのではないのでしょうか。

ラ・フォル・ジュルネもその1つの例ですが、やはり各地でそのようなものをやられるとまず当たりますね。今年の5月のラ・フォル・ジュルネでは、恐らく来場者の累計がこの7年間で500万人を超えることになるのではないかと思います。来場者の分析をしてみますと、クラシックの初心者というのは50%なのです。ということは、本当にクラシックが好きなわけではないけれども、行ってみたら、それが今度はまた次の年に来てくれるというようなことになるわけなのです。

ですから、そのようなマネジメントをいろいろ考えていくということと、都はそういうことに対する計画を今から進めておくことが必要だと思うのですね。

○山本評議員 この議題に関して、私は自分の生きている時間の中で何とか1つの答えを

見出したいと思っております、最近ではアメリカのラスベガスからニューヨーク等を見て回っております。アメリカなどで具体的にどうやって事業を行っているのかを見てまいますと、日本側はいろいろな部分がいまひとつ弱いという感じがしております。先ほど三宅さんがおっしゃいましたように、ファッションといえども我々はまさに道なきところを切り開いていったわけです。

一方、宮田学長のところの学生さんのお仕事を見せていただきましたけれども、芸術祭は非常に高い水準にあるのです。けれども、それが学内だけで止まっている。なぜあれだけのものがまちへ出ないのか。学生に聞いたら、東京藝大も素晴らしいけれども、互角のレベルの大学も結構あるということなのです。そうすると、すごい山車が日本じゅうに出てくるのではないかと。まさに江戸初期の狩野永徳が描いた京都の図に値するぐらいのお祭りが、学生たちのつくっている山車を使いながら実際にできるのではないかと、等々の面白い夢が描けるのですが、一方で、どこかでしがらみといえましょうか、社会的常識のようなものを働かせませんと、出る杭は打たれる的なものがどこかにあります。ですから、先ほど三宅さんがおっしゃったように、この日本で活動したことが世界にニュースになっていない構造が決定的だと思うのです。どなたがどう反論されても、今、その情報源や活動源はあるのですが、それを動かすための人材や資金などが全く欠けております。この点、知事はどうお考えになっていらっしゃるのでしょうか。ほかの国と具体的に比較したら、比べ物にならないというのが現実かと思えます。

○福原会長 ありがとうございます。

○石原知事 それは結局国の問題なのです。国の姿勢なので、前にも申し上げたと思いますが、例えば海外の先進国へ行くと、その国の代表的なデザイナーのお店は国際空港にあるのですが、日本では、とにかく三宅さんのお店もない。変な話なのです。文化勲章を受章されて大変それは嬉しかったのだけれども、こんなことでよいのでしょうか。

1つそれに関連して申し上げたい。この評議会でも国に要望していただきたいのです。映画はやはりとても大事なメディアだと思うのです。いろいろなところのロケーションを彼らは望むのですが、東京でやりたいという希望が圧倒的に多い。それで、手続が煩雑過ぎるのでワンストップにしました。ただ、その1か所で認可しても、最後は警察が認めないのです。これは警察が非常に頑なで、例えばヘブンアーティストでも、歩行者天国を警察が反対したことがある。結局、その時の警視総監と話して、許可してもらいましたが。

この評議会で、とにかく国に都会でのロケーションの融通をもう少しきかせるように要望してください。

○福原会長 東京は日本の地域であると同時に日本を代表するという二重性があるので、国との関係というのが難しい。だから、あるところは連携し、あるところはお互いに不足しているところをカバーし合うような形でいかないといけないのですが、それがまだ達成できていないところです。

○石原知事 国の役人は、自分たちの特性はコンティニューイティとコンシステンシーだと言うのです。この変化の時代に一貫性と継続性を自慢したら何にもできるわけではないのですが、とにかく地方自治体が気のきいたことをやっても、彼らは絶対にそれを受け入れません。変な沽券があるのか、絶対にまねしない。

例えば空気の問題も、神奈川県も埼玉県も千葉県も共同してくれましたよね。あのようなことを国が進めればよいのに、NO_x法のようなざる法をつくる。だから、大阪へ行く、東京へ来たなら捕まるようなトラックが向こうでは相変わらず走っているのです。こういう現象は文化の分野でもあります。

だから、東京も先端的なことをやるのは大変素晴らしいし、皆さんに力を借りようとしているのですが、国をどのように説得していくかも考えていかないといけない。

○福原会長 これはそろそろ真剣に考えなくてはいけない問題だと思います。

○野村評議員 抽象的なことしか申し上げられませんが、伝統芸能という観点から考えると、アクターやティーチャーというところでとどまってしまうがちで、なかなかプロデュースやマネジメントというところまで広がりません。今回設置された部会でもそうだと思いますけれども、海外発信についても、国にはできないような、現代芸術とドッキングした伝統の発信なども考えていくべきです。山本評議員、それから蜷川評議員、この方々のお知恵やお力をもっとお借りしていきたい。伝統という狭い範疇だけで論じるのではなく、より広い大きい視点、視野を持って、東京ならではの発信がいろいろなお知恵から生まれてくればと思っております。

○福原会長 狭いとおっしゃいましたが、狭いところでも全く手が回っていないので、できることはできるようにしていき、そして今のような大きな構造のようなものも一方で考えていかなければならないということだと思います。

今日ご出席の評議員の方々のご意見はこれで一通りお聞きしたのですが、ご出席いただ

いております専門委員の方々に何かあればお伺いしたいと思いますが、いかがですか。

○後藤専門委員 埼玉大学の後藤と申します。先ほどからお話を伺っていて、アートをもっといろいろな空間で展開をして目に見えるようにしていくというようなこと、そこをマネジメントする人たちを増やしていくというようなこと、また伝統と現代を組み合わせでより面白いことができないかといった、様々なアイデアが出ていて、それが実現していけば本当に素晴らしいと思っております。

私は制度について提言するという事で専門委員になっておりますので、1つ提言申し上げたいと思います。東京都にホテル税がありますが、それは恐らく観光振興ということで、観光案内板の設置などに使われているのではないかと思います。しかしアメリカの都市ですと、サンフランシスコなどもそうですけれども、ホテル税の14%は現代アートの振興に使って、それで文化観光を振興し、その収益をまたアートに投資をしていくという仕組みが税制の中でつくられているわけです。

せっかくですから、東京都も少しホテル税の使い道をそのように変えて、ホテル税の中の何%はそういう目に見える空間のマネジメントに使うとか、アートに使うとかといったことにしていくと、本当にアートあるいは文化と観光が非常によい形で結びつくのではないかと思いますので、ぜひ検討していきたいと考えております。

以上です。

○福原会長 ありがとうございます。部会のほうでまたご検討いただき、具体的にご提言ください。

ほかにありますでしょうか。どうぞ。

○逢坂専門委員 発信ということですが、私たちは、例えばラ・フォル・ジュルネを受け入れることはできますが、ラ・フォル・ジュルネのような企画を打ち出すことができないわけです。そういうことを考えますと、私たちが東京都の文化を考えた時に、何をやっているのかを伝えることがまずは必要だと思います。その時に、残念ながらやはり英語で情報を出すということがほとんどできていない。これが今の時代基本になると思うのです。公立美術館の人間としてはとても残念なのですが、やはり私たちも自分たちの事業をすべて英語で発信するということができていないのです。

森美術館の場合には、どんな事業でもチラシもホームページも必ず英語とのバイリンガルにしています。ですから、海外の美術館の方がいらっしゃいますと、やはり森美術館の

ことはよく知っているのです。大きな事業を実施するためにはある程度の計画性と予算が必要なのですが、まずは今、共通言語となっている英語できちんと情報を出していくということを進めていけばよいのではないかと思います。

実際に都庁の方に聞きましたら、まだ英語での発信はホームページでできていないということでしたので、今後、英語での発信をまずは初めの一歩ということになさるべきだと思います。それは私たちの足元も含めてそう思います。

○福原会長 全くそのとおりで、写真美術館も平成25年から改装の予定ですが、改装後は英語を必ず表記するようにするにはどうしたらよいかということは今考えているところです。これは大変な費用と手間がかかることでもあります。先日、山種さんに伺ってみたら、山種さんは必ず小さなリーフレットのようなものを用意してあるとのこと。英語だけでよいのかとこの間聞きましたら、山種さんの場合、アジア系の方はほとんど見えないそうです。ヨーロッパ、アメリカの方が多いため、結局英語だけで我慢していただくようなことになっているようです。ですが、これも本当に手間と時間と費用という問題がありますので、どうしたら簡単なもので済ませることができるかということを考えております。

ほかにおありですか。どうぞ。

○森評議員 実際問題として簡単なものではなかなか済まなくて、本当に手間と時間と費用がかかります。今度、私どももまた美術館支援のガラパーティーを開くのですが、その時にオークションを行いますので、今、そのパンフレットをつくっておきまして、そういうものも英語と日本語と両方つくります。一度始めたら、今回だけは日本語だけでよいということを考えてしまっただめなので、とにかく常に両方の言語で、ということにしております。

それで、今、逢坂さんが言ってくださいましたけれども、外国の方の認知もそれで上がっているということは大変うれしいことだと思いますし、本当にその辺は大事な部分だと思います。

今もありましたように、これからは表記に韓国語、中国語も入れなくてはいけないと思います。パンフレットまではまだそういう計画はありませんが、少なくとも英語と日本語の両併記ということはとても大事なことだと思います。

○福原会長 最後に、三宅評議員。

○三宅評議員 先ほどから伝統芸能やデザイン、ほかのアートのことも出てきましたが、

私はあまりその間に垣根をつくらず、もう少しざっくばらんに考えていかないといけないと思っています。そしてそれをもっとまちの中や生活の中で話題になるように仕掛けていかななくてはいけないのではないかと思います。

私は非常に伝統芸能が好きで、能にも行きますし、それから先日も玉三郎の歌舞伎を見に行きましたが、何て美しいのかと思いました。最もコンテンポラリーな部分があるわけなのです。そういったことも含めて、我々はこれをもう一遍考えてみなくてはいけないと思います。それから、もう1つ非常に気になるのは、今、「クールジャパン」という言葉が使われているのですが、クールという言葉は20世紀の1990年ごろにできたもので、それを「格好いい」という意味で若い人は使っていたのです。その後はオーサムできました。クールもオーサムもいわゆる流行語、トレンド語ですから、そういうもので日本を表現するのではなく、もう少し知恵を使わなくてはいけないのではないかと思います。

実際にミラノなどいろいろなところでクールジャパンと言われているものの展示会を開いたりしているのですが、それは単なるサンプルなのです。サンプルに皆さんがお金を払っているわけです。デザイナーまでサンプルをつくってはおしまいである、どうしようもないのではないかと思います。やはり我々の仕事が甘い。つまり現実感を持ってやっていないという部分が非常に強くて、それをまた行政も認めている。それには時間がないということかも知れませんが、人に渡すものだ、人に話題にしてもらいたいのだ、という欲求をもっと強く出すべきではないかと思います。

だから、クールジャパンという言葉は、都としてはあまり使わないほうがよろしいのではないか。東京都は「スマッシュ」ぐらいな、動きのあることを常にやるようにされたらどうか。

確かにパリなどにいますと、朝早く子供向けに日本のアニメ番組がありますが、日本のものは少し幼稚な感があります。もう少しスケッチ色も欲しい。クールという言葉で全部いいということにしてしまうのではなく、もうアーティストも含めてものをつくる人間に国籍はあまり関係ない時代が来ていますので、そういうものを超えたところで評価できるものを考えていくべきです。そのリーダーになれる人というのは日本にはたくさんいると思うのです。だから、そのような人を見つけて、また一緒になって仕事をしていくのはよいのですが、ミラノサローネなどで見るような、真っ白で全部つくってきれいに見せるといった、そういった発想のものの見方はやめたい。私が小学生だったら、多分野村さんに

お願いして、能の衣装の不思議な色使いなどを勉強させていただきます。歌舞伎などもそうです。我々はそういうものを見ることによって世界観ができてくるのではないかという気がしますし、そのように、もっと日常の中で文化をどう考えるかということが重要だと思います。

○福原会長 ありがとうございます。東京都としては「クールジャパン」に参入するつもりはございませんので、それはまたちょっと別な話になります。

ありがとうございます。引き続きまして、芸術文化支援の新たな推進体制を現在考えておりますので、片山委員からお願いいたします。

○片山専門委員 お手元に資料6がございますので、これに従ってご説明させていただきます。

「芸術文化支援の新しい推進体制」ということで、本日は特にその実行体制についてご提案をさせていただきたいと思います。

部会のほうでは仮に「東京型アーツカウンシル」と呼称しております。アーツカウンシルと申しますとイギリスのものが大変有名でございますが、世界の幾つかの国にございまして、アジアでもシンガポールや韓国にございます。基本的には文化政策を実施していく準政府組織、政府に準ずる組織として運営されております。

ここでポイントが2つございまして、1つは、政府が出資するのですが、独立性が高い組織であるということが第1点。それから第2点目は、高い専門性を有しているということでございます。

従いまして、東京型アーツカウンシルを定義するといいたしますと、「都から一定の独立性を保ちつつ、芸術支援プログラムの立案、実施、それから支援先の評価を行っていく専門機関」というようなお答えになろうかと思います。

また、その機能といたしましては、東京芸術文化評議会——この場ですが、ここにおける政策提言に基づき、都が示す方針のもとで芸術文化活動に対して資金や情報などによる総合的な支援を行っていくというものでございまして、目指すところは、「専門的かつ長期的な視点」に立った芸術文化活動の支援を可能とし、より効果的な文化振興を展開するというところでございます。

資料6の左に「新たな推進体制」ということで、知事を中心といたしました東京都の本体、この芸術文化評議会、それから東京型アーツカウンシルという3者が出ております。

この3者の関係をご説明しますと、芸術文化評議会において政策提言を行っていき、それを受けて、知事、つまり東京都が政策立案を行い、指針を策定し、芸術文化支援に関する財政支出を東京型アーツカウンシルに対して行います。東京型アーツカウンシルは、それを実施しまして、その成果、あるいは結果を報告します。東京芸術文化評議会は、再びそれを受けまして、東京型アーツカウンシルの成果パフォーマンスを外側から評価いたします。そして知事に報告をするといったサイクルを考えております。

東京型アーツカウンシルの機能と申しますか、実施する仕事としまして、芸術文化活動への助成を行います。現在「助成」という言葉で行われているのは文化発信事業助成という8,000万円の予算がついたものだけですが、このほかにも文化発信プロジェクトの中で助成に近い形の、都の資金を外部の民間の団体等に出して、そして都の政策目的を遂行していくという形のものでございます。これを東京型アーツカウンシルに集約しますと10億円余りの資金になろうかと思いますが、そのくらいの規模で進めていきます。そのためには調査研究活動、あるいは事業実施後の事業評価を行ってまいります。それから、相談、あるいは情報の提供を行ってまいります。さらに、将来的には、極めて実験的な事業、先駆的な事業のコーディネートもここでやっていけるのではないかと思います。さらには、前回、あるいは前々回こちらでご審議いただきました民間の資金、民間寄附を資金とした助成、「TOKYO ARTS FUND」の機能もこの中に入れてまいります。これらをプログラムオフィサーという専門スタッフが差配していくという形を考えております。もちろんここで情報の発信と申しますか、社会への広報も同時に行ってまいります。

このように、評議会、知事を中心としました都、それからアーツカウンシルの3者がこのように役割分担を明確にし、責任の所在をはっきりさせていくということを目指しております。

資料6の右のほうに移りまして、東京型アーツカウンシルの設置効果というのはどういうものか、言葉をかえまして、何のためにこれが必要なのかということでございます。

「芸術関連の専門家を配置し、現場の実情をもとに、すぐれた芸術文化活動の発掘など戦略的な支援を実施」ということですが、大きく5点ここに挙げております。

第1点目は、調査活動に基づいた的確な助成のプログラミングを行ってまいります。それによって具体的な施策が政策の目的に真にかなったものになっていくということでございます。

この評議会でもこれまで非常に有益なご意見や政策提言がありました。それから、評議会の以前にも東京都文化振興指針や「東京都の文化施策を語る会」からの提言など、非常に素晴らしい提言が出ていますが、政策レベルと実際に支出するレベルとの間の、中間段階がない状態のように外から見て感じておりました。実際にはいろいろな施策のオプションがあるはずで、例えば芸術活動を振興していくにしても、公演や展覧会に対して予算をつけて盛んにしていくという考え方もありますし、芸術的なスキルを高めるための教育的な投資をしていくという支援の仕方もあります。あるいは観客を開拓するような支援の仕方もありますし、それから、先ほどから出ていますように、むしろプロデューサーを養成する支援や、マネジメントを強くするという支援を先に行うというようなオプションもあります。

しかしながら、例えばプロデューサーを育成していくにしても、どうやって育成するのかという次の問題があるわけです。これは実際に調査活動を行い、やはり現場を知らないとできないことでございます。ですから、助成のプログラミングを調査から得られた具体的な事実に基づいた形で行っていきます。それによって目的と実際の施策が一致するわけでございます。

それから、2番目は、審査機能の強化です。先ほど芸術家をあまり甘やかしてはいけないというご意見がありました。本当に意味のある活動に対する重点的な配分をこれで可能にしていきます。それによって効果的な助成が実現することになると思います。

今までも専門家が助成金の配分に関しては関与していらっやっったと思います。しかしながら、例えば作品の内容などに関しては評価が可能であっても、例えばこのプロジェクトにこれだけの予算が本当に妥当なのかといった判断は、その点に明るいプロフェッショナルでないとなかなか難しいということがございます。そのようなことに対する対応が今まであまりなされてこなかった。これを可能にするのが第2番目のポイントでございます。

それから、3番目に、事後評価の適切なフィードバックです。今まではともすれば資金を出した後でフォローをしない面があったと思いますので、きちんとフォローを行う体制にします。個々の助成の評価も非常に大事ですが、プログラムレベルの評価はさらに大事でございます。ともすれば一旦始めた助成スキームがずっと続いていくことになります。やはり常に有効性、このやり方でよいのかということ問うていかないといけません。それによって廃止すべきプログラムは廃止する、よいものは残して発展させる、というよう

な施策の組みかえをきちんと根拠を持って行っていくということが3番目のポイントでございます。

それから、4番目に、助成金の交付に加えて情報やノウハウを提供するということです。同じ助成金であってもその効果を高めるために、支援の受け手のほうのパフォーマンスを高めるといったことが一つの発想としてあります。受け手側のマネジメント能力、言葉をかえれば助成金を有効に使ってくれる能力を高めるといったことを同時にしていくわけです。これもやはり専門家でないとなかなかそういったアシストはできないということでございます。

このほか場や施設の支援もこれに加えてよいかもしれませんし、それから、助成の効果という点から言いますと、ちょっとした助言のようなことが重要になります。例えばパリで公演するということでしたら、では、この人とこの人とこの人に会ってきなさいというようなことを助言して、紹介のメールの1つも出しておいてあげるといったサポートは費用なしでできます。こういったことを機動的に行っていくようにしたいというのが4番目でございます。

それから、5番目は、民間寄附の受け皿の用意です。すべて都の予算でということは今後なかなか大変ですので、民間から民間への寄附という形で資金が動くように、その手助けをしていくということが前回、前々回にご報告した「TOKYO ARTS FUND」の趣旨でございますが、そのきっかけをここで与えるということでございます。結果的に都の文化がよくなればよいわけですから、資金の出し手は都でなくてもよく、民間のお金を出しやすくしていくためのプロモーションをここで行っていくということでございます。以上によりまして、専門スタッフは必要ですので人件費等のコストアップはございますけれども、それを織り込んだとしても経費対効果は大きく上がっていくことが期待されます。また、これが期待できるからこそ、いろいろな国でこのアーツカウンシルというものが採用されているということだと思います。

設置先でございますけれども、これは目的からしまして芸術文化の振興をミッションとした公益財団等がふさわしいと考えられます。寄附の受け入れを考えますと、税制優遇が適用される公益財団等がふさわしいであろうと思います。

現在、文化庁でも日本版アーツカウンシルの検討が進んでおります。どういう人材が必要で、どういうふうにその人たちをリクルートし、育てていくのかという現実的な部分を

ここでご議論いただければ、そういった面にもステップを踏み出していきたいというふう
に考えております。

以上です。

○福原会長 ありがとうございます。

それでは、続いて、今村参与からお願いします。

○今村参与 このような新しい推進体制ですけれども、その原理といいますか、なぜこの
ようなことを考えなくてはいけないのかという点についてご説明申し上げます。まず、や
はり通常の行政が行っている許認可の業務や管理監督業務と文化の施策が異なるというこ
とだと思えます。資金の流れもあります、それと同時に、現在、東京都庁内で行われて
いる、助成金交付や事業など、全てをある意味で都が行っている。もちろん財団も存在し
ますが、先ほど片山さんからもご説明がありましたように、専門家によるチームをつくっ
て、そことパートナーシップをとりながら、3者がきちんと協議をしながら進んでいくと
いう形の新しいシステムが必要だろうと思えます。

私からの補足説明のみでなく、こちらに東京都歴史文化財団の加藤エグゼクティブアド
バイザーがいらっしゃいますので、お話をいただきたいと思えます。加藤さんは文化庁の
政策部会の委員でもいらっしゃいますし、メセナ協議会でもいろいろご提言をいただい
ていますので、なぜアーツカウンシルのようなものが国でも検討されているのか、なぜ現在
必要なのかという点をご説明いただきたいと思えます。

○加藤エグゼクティブアドバイザー では、既に仕組や必要性は一応網羅されていると思
いますので、少し観点を改めて申し上げたいと思えます。最初に、今までどちらかとい
うとネガティブというか、弊害があった点が例えばどう変わるのかという点を2つ取り上げ
たいと思えます。1つは、先ほど芸術家を甘やかしてはならないという話がありましたが、
こういう助成の制度をつくとどうしても既得権益に守られる傾向があるわけです。ここ
はそれを徹底的に洗い直すわけですから、支援の仕方を根本的に変えていくという意味に
おいては、今後、既得権が破壊されることとなります。新しい、面白い若手の発掘をする
ようにという知事のお話もありましたが、そうした事柄に対応できますし、アートプロデ
ューサー等に助成をするというような仕掛けもできるという点が1つでございます。

今の点は芸術文化の内部の問題だと思えますが、2点目は外部の問題に関するものです。
芸術文化への支援を行うと、どうしても外部から効果がちっとも見えないという批判が頻

繁に出てきます。昨今の例の事業仕分けでも非常に問題になりましたけれども、芸術文化の中身や、どういうふうに振興すべきかという政策そのものを持っていない人が、対費用効果という金科玉条だけでいろいろと攻撃をしてくる。それに対してきちんとしたデータをもって反論することができるという点で、今までの状況から大きく変わるだろうと思っています。

こうした制度を導入すると、さらにどういうよい点があるかといいますと、1つは、中長期の政策戦略が描けるということです。これは先ほどから何度か長期的な視点ということが言われていますが、東京都の例でいいますと、例えばさまざまな文化施設があるにも関わらず、その文化施設間のネットワークが十分ではない。そういう点を改善し、きちんと相互に連携をとらなければお金を出さないということもできるわけで、そうした中で中長期の政策ができるようになる。事業についても先ほど大変示唆に富んだ提案がありましたが、現代芸術と連携した伝統というようなことはできないのかといった場合に、放置しておくということも誰も発明しませんから、ここで助成を出していく時に、そういう観点も入れなければ来年度から助成金を減らすということも言えるわけです。逆に言うと、そのような事業に対して、中長期の展望を持って実施してくれるなら大いに支援ができると言えるので、中長期の戦略を描けるようになるのです。

そうした中長期の戦略でもう1つ非常に重要なのが国際的な都市戦略です。都市文化政策と言えばよいかと思いますが、ご案内のとおり、今、中国、韓国など近隣の国の都市文化政策はすごい勢いであります。これがどうしてこんなことが実行できているかというのと、このバブル崩壊後の20年間、日本がどうして浮上できなかったかということも彼らは徹底的に調査研究したわけです。その結果、日本人は創造性に全く関心を示していないと。つまり文化芸術を中心とした幅広い文化の創造性に日本人は全く手をつけていないと。だとすれば我々はその逆をやればよい。つまり、今後創造性を強化していけばよいということで戦略を打ち立ててきているわけです。そうした中で、東京が本当に東アジアはもちろん世界の都市間の競争の中で文化戦略の面で打ち勝って行って、なおかつ、東アジアにおいては、単に競争するだけではなく、それらの都市間のネットワークの先頭に立っていくという役割をもし果たすとすると、こうした制度が必要だろうということだと思います。

そうした点から、今ご説明があったような新しい制度づくりをしてはどうか。国のほうでは、来年度の予算案の中でアーツカウンシルに関する調査研究及び試行的な実施という

ことを明記しています。その中で、東京は日本の一番重要な都市ですから、国のアーツカウンシルをもリードできるような体制が早急に必要だと考えられます。

以上でございます。

○福原会長 今のご説明のとおり、国の小型を東京都がやろうということではございません。国は国でアーツカウンシルをお考えですが、それとは関係なく、今までの芸術文化評議会の発展の上に、もう少し具体的な形で東京の文化を何とかしていく方法がないかということで、これは1つのトライ、試行錯誤のようなものになるかもしれませんが、こういうことを今考えているということでご案内したわけです。何かご意見があれば伺いたいと思うのですが、いかがでしょうか。どうぞ。

○野村評議員 今の片山さんのご説明で氷解しましたが、字句だけ拝見していると、そうではないのではないかと思ったりしましたが、この「民間寄附の受け皿の用意」というところです。いろいろな芸術団体が公益法人制度改革に向けて試行錯誤しながら、一般社団を目指すか、財団を目指すか、公益社団を目指すか、といろいろ動いております。お琴の団体も公益社団になりましたし、私どもの能楽も公益社団の認定を受けましたが、そうしますと、やはりこの民間からの寄附がある程度必要になり、大事な要素になってきます。しかしながら、民間の寄附によって都費を圧迫するような形になってしまっただけでは違うのではないかと思ったりしました。都費による助成の拡充を大に行うことがまずは基本としてあるべきなのではないかと思ったわけでございます。

○片山専門委員 表現が少し誤解を招いてしまったかもしれません。都費による助成はしっかり行っていただきながら、結果的に全体のパイを飛躍的に増やしていかないといけないと考えております。そのためにはやはり、一番伸び代が多い部分である民間寄附を増やしていく必要があります。そのきっかけとなり、1つの流れをつくって、背中を押していくような役割を果たしたいということでございます。

○福原会長 考え方としては、民間寄附を恒常的に継続していくにはどうするかということですが、少しご説明が足りず申しわけございません。

ほかにおありでしょうか。

○山本評議員 韓国、中国の例も出ましたけども、よしんばこの議論をされている数字が10倍になったとしても一、本当に満足できるレベルなのかと疑問に思うのです。失礼ながら、議論に値しない額を扱っているのが、今の日本国の文化の状況だと思うのです。

経済の世界にすり寄らないとどうしてもこの数字は集まってこないというのが現実です。いつも会議が終わる時に、今日の一日の収穫って何だろうかと考えます。確かに進歩はしていますが、世の中の変わっていくスピードと、この大才能が集まっている情熱の会議とのスピード感のバランスが悪いのではないかと思えてならないのです。

○福原会長 民間という場合、それは要するに経済面です。同じことですよ。

○山本評議員 そうです。

○宮田評議員 たまたま文化審議会の政策部会長をやっているものですから、そちらでも日本版アーツカウンシルを云々という議論になりました。大変大事なことです。アーツカウンシルというものがまだ皆様の中であまり認知されていない。そこをもう少し具体を持たせることからスタートしないといけないのではないかというところなのです。文化庁の仕事は少し規模が大きいものですから、なかなか具体になりにくいという感じが私としてはここ何年かしておりますが、このペーパーをこの間今村さんにお持ちいただいた時には大変ありがたいと思ったのです。そういう意味では、東京というのはとてもやりやすいし、それを国にも持っていけるし、小さな地域にも持っていくことができるような見本になるのではないかという気がいたしました。これはぜひ知恵を絞っていただきたい。そして、国と別に考えず、一緒に利用できればと思います。

○福原会長 国の政策は抽象的である場合が多いので、何を行っていくかがよく見えないことがあるのです。東京都の場合は現場と直結していますから、より具体性が見えてきます。モデルの1つになることができればと思います。

それから、国でもアーツカウンシルと言っていますが、アーツカウンシルはイギリス型が有名ですが、そのほかいろいろな考え方があって、東京都の場合どのようなアーツカウンシルにしていくかということもまだ明確ではないですね。ですから、東京都で設置できるものが私たちの考えるアーツカウンシルだと考えて、それを構築しようというわけですので、よろしくお願いします。

○宮田評議員 逢坂さんがお話しされていましたが、私の大学では多言語化を進めております。というのは、日本語を英語にし、英語を中国語、韓国語にして、最低4か国語で表現しようというように今進めております。そのためには、まず同じ大学関係で外語大と連携をとりまして今それを進めておりますが、そういう持っていく方によって、留学生なども非常に勉強になりますので、新しい勉強の方法論が出てくるという感じがあります。私

どものこれからの動きですけれども、ぜひとも森先生とご一緒に何か進められたら、と思
いました。

○福原会長 以前先生にお聞きしたところでは、先に英語でコンセプトを立ててから中国
等に翻訳したほうが、コミュニケーションが速いということでしたね。

○宮田評議員 はい。

○山本評議員 野村先生に関係するお話ですけれども、私、ソウルからバスで3時間ぐら
いのところに仮面劇を見に参りました。季節が悪く、その地域を研究できなかったのです
が、その仮面劇という切り方をすると、世界にはインドネシアからチベットをはじめこれ
だけ広がるのかというような切り口の博物館があったのです。それを見た時に、どうして
もお能の方というのはその方向を純粹に見ていくということになると思いますが、なぜあ
のような面をつけて、あれだけの美学の織物を、約10種類ぐらいの柄を重ねて表現してい
るのか等々の別の切り口から考えていくと、面白いものに発展する可能性があるのではな
いかと感じました。

また、今回の資料を拝見していて、成功した例ということで、森さんのところの例が出
てきています。

○野村評議員 アートナイトですね。

○山本評議員 はい。ほかの例もありますが、見ていますと、いろいろなものが混ざり合
っているのです。そのような点からしますと、先ほど藝大と外国語大学と一緒に活動する
といったことも、一瞬不思議に思いますが、非常に理にかなっていると感じます。こうい
うようなクリエイティブな方法を使わないと、ないものはどうやっても絞れないという現
実が横たわっております。面白いことの触発になっていけばよいのではないかと思います。

○野村評議員 おっしゃるように、仮面というのは大きな世界を結ぶテーマだとは思いま
す。

○福原会長 いろいろご意見が出ましたが、先ほど山本評議員が言われたように、現実の
時間の動きとこのような委員会での論議の時間の動きではけたが違うのではないかとい
うことも踏まえて、3期目以降、いかにスピードを上げて、より建設的な成果につなげるか
を考えていく必要があると私は考えております。

私は、アートマネジャーなり、プロデューサーなり、プランナーなり、そういう人たち
を発見して、10人育てることは難しいにしても、1人か2人優秀な人を育てて世の中に出

してあげることができれば、それだけで東京の存在感が上がると考えています。これもまたどうやって見つけるかという問題がありますし、名乗り出てはなかなかくれないと思いますので、研究しなければならないことだと考えています。

ということで、お集まりいただいているいろいろ議論して、皆様からのご意見をいただきました。これを今後生かしてまいりたいと思っております。

この都の文化政策並びに実施面につきまして、今後ともご意見やサジェスチョンをいただいたりして、それを次期のこの評議会でも受け継いでいただくようにしていきたいと考えています。

ということで、今日は第10回の東京芸術文化評議会でしたが、そろそろ予定の時間になりましたので、これで閉会としたいと思います。ありがとうございました。

以上